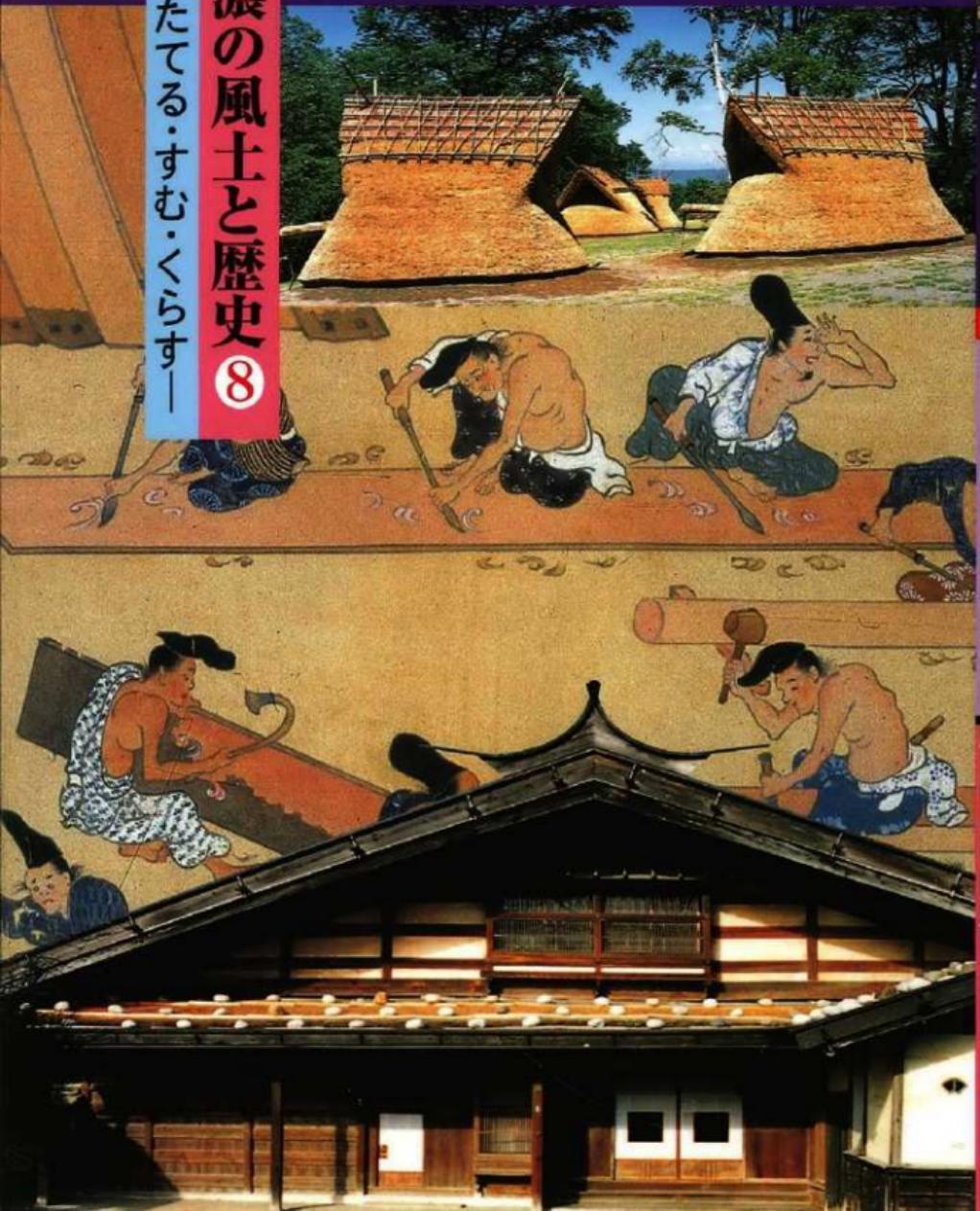


長野県立歴史館

Nagano Prefectural  
Museum of History

信濃の風土と歴史 8

住—たてる・すむ・くらす—



- ・表紙写真 与助尾根遺跡縄文復原住居 (茅野市尖石縄文考古館蔵)  
春日山権現殿記絵巻 (模本 東京国立博物館蔵)
- ・裏表紙写真 本棟造り 堀内家住宅 (堀内仲二氏庭 重要文化財)  
・背景写真 屋根の融雪ができる住宅 (飯山市)  
ヒノキ埋もれ木の年輪 (長野県立歴史館蔵)

## はじめに

長野県立歴史館では、信濃國・長野県における生活文化をまとめ、平成一年度から「衣・食・住」に分けて、ブックレットを刊行してきました。平成一三年度は「住」を刊行し、これで三部作が完結することになりました。

住まいほど人びとが長年の生活中で経験した知恵にもとづき、風土によく適応し、あるいはきびしい自然条件に対応してつくりあげた消費財はないかと思います。個人の趣味や志向にもとづいてつくられた住宅は、「民家」とはいえません。

信州の風土は広くてきわめて多様ですが、各地域の自然や文化に適応した民家が多くあります。信州の農山村における近世以降の農家・林家の基本的な民家は、寄せ棟の茅葺きで平入りです。正三角形に近い屋根の勾配は、重い積雪に耐えうるので、力学的に合理的な構造になっています。また、分厚い茅葺きは、強い日射をさえぎって、真夏でも部屋の内部が涼しく、一方、きびしい冬には寒さを防いでくれます。信州でどれも茅は、標高が高いほど細いのですが、硬くて品質がよいのです。茅葺き屋根は圍炉裏で火をたくとよく乾燥して、虫がわかないで、南向きの斜面は五〇年間も保たれています。

第二次世界大戦後、毎年茅場に火入れをすることができなくなり、屋根を葺く茅の入手が困難になりました。また、トタン屋根材が安く出まわったことから、農家の屋根の多くは赤や空色などのカラートタンに変わりました。この結果、農山村の落ちついた村落景観は失われてしまいました。そこでトタンの色彩を茅の色に近いものに修景することが望まれています。

信州の町屋は、もとは板葺きの石置き屋根が多かつたのですが、江戸中期以降、瓦葺きに変わつていきました。耐火性が重要視されることから、漆喰の白壁を厚さ五寸（約一五センチ）ほどに塗つた「大壁造り」や一尺（約三〇センチ）ほどに塗りこめた「土蔵造り」がつくりされました。

長野県は第二次世界大戦中、大規模な空襲を受けなかつたこと也有つて、長野や松本をはじめとする中小都市には、大壁造り・土蔵造りなどの町屋が各所に残されており、重厚な町並景観がみられます。中山道の宿場町であった妻籠宿（南木曽町）と奈良井宿（猪川村）、北国街道の海野宿（東部町）などには、江戸末期の町並がよく維持されています。そのことが評価され、文化庁から「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。このほか、小諸・長野・須坂・小布施・松代・猪荷山・松本・大町・下諏訪・飯田などにおいても町並を修景することで、町づくりを進めています。本書は繩文の昔から現代に至るまでの信州における住宅の移り変わり、またその中で營まれた暮らしについて書かれています。このような住文化の歴史をよくみて、二一世紀における新しい住宅文化を創造していく必要があるでしょう。

二〇〇二年三月

## 信濃の風土と歴史⑧

住一たてる・すむ・ぐらすー

はじめに

目 次

原始の家を掘る

原始の住まいのようす

竪穴住居内の住みわけ

仕事場となつた家

ムラの暮らし

家を建てる道具【テーマ学習①】

川とともににある住まい

富裕農民の住まい

門前町のにぎわい

戦国人の住まい

寺院や館をいろいろな中世の施設

住まいを「かこむ」形の変化【テーマ学習②】

村人の家と生活

城下町の家並

宿場のようす

32 30 28

26 24 22 20 18 16

14 12 10 8 6 4

2 1

民家の間取りと部屋

地域で異なる家の造り

トイレの移り変わり 「テーマ学習③」

長野県につくられた洋館

養蚕農家の移り変わり

大正時代の住宅事情

生活の変化と住まい

鉄筋コンクリートの家・これからの家

あかり 「テーマ学習⑤」

「日本の屋根」 信州の住文化

参考文献

協力者のみなさん

あとがき・利用案内

# 原始の家を掘る

## 堅穴住居跡の発掘調査

(弥生時代中期 約2000年前 長野市松原遺跡)

断面にあらわれた洪水に埋もれた家

888年の千曲川の大洪水によって川砂に埋もれた

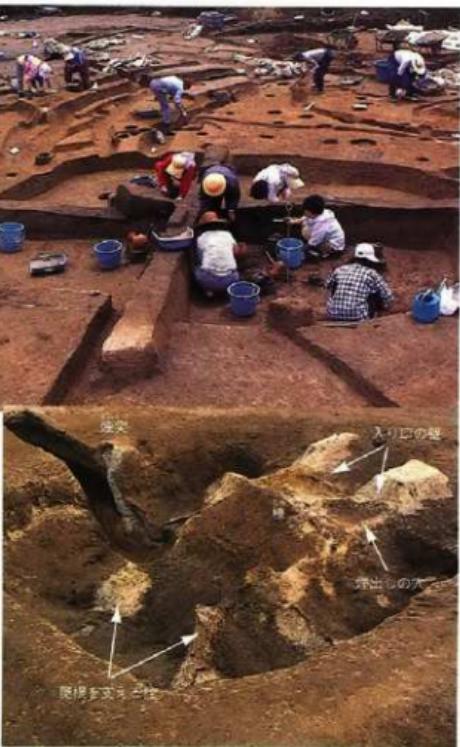
堅穴住居

(平安時代 東京・葛西地区遺跡群)



火山灰に埋もれた家 (古墳時代 約1500年前 群馬県高崎市黒井峠遺跡 子持村教育委員会提供)

黒井峠遺跡は、榛名山の噴火によって厚さ2mの軽石層におおわれた。そのため、普通なら残ることのない堅穴住居の屋根の構造までわかる重要な発見となった。写真の住居は寄せ棟でしかも土葺きであったことがわかった。



## ◆発掘調査でわかる建物のようす

右上の写真は、何をしているところかわかりますか。

弥生時代の家の発掘調査をしているところです。発掘調査をしていると、「なぜ、そこに家があるのがわかるんですか。」とよくたずねられます。縄文時代から古墳時代は地面を掘り下げて床をつくった半地下式の堅穴住居とよばれる家に住んでいる場合が多く、その家が使われなくなつたあとにまわりの土が入りこみ、土の色のちがいから家の形や大きさがわかるのです。こうした調査の積み重ねによつて、数千年前という大昔の家のようすが少しづつ明らかにされていくのです。

### ◆発掘資料から建物を推測する

発掘調査からわかる当時の家のようすは、多くの場合地面に掘りこんだ堅穴住居や柱穴の跡がわかるだけです。家を支える柱や屋根を支えるカヤなど植物性のものはほとんど残りません。どのような材料をどのように加工して家をつくつたか、屋根の形や高さ・葺き方はどうだったのかなどは、よい条件がそろわないとわかりません。

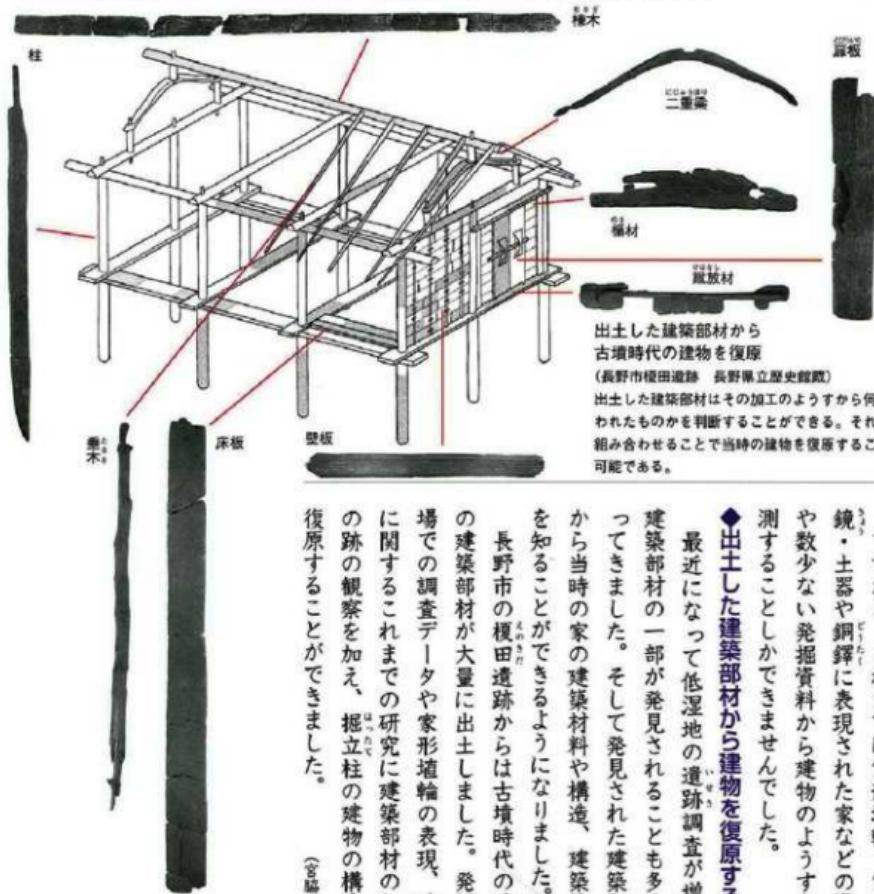


家形埴輪

(古墳時代 滋賀県天神1号墳  
須坂市立博物館蔵)

家屋文鏡にみえる建物

(古墳時代 奈良県佐味田宝塚古墳 宮内庁蔵 右は建物の復原図)

上：高床住居 左：高床倉庫  
下：竪穴住居 右：平地住居

ですから、これまで家形埴輪・家屋文鏡・土器や銅鐸に表現された家などの資料や数少ない発掘資料から建物のようすを推測することしかできませんでした。

#### ◆出土した建築部材から建物を復原する

最近になって低湿地の遺跡調査が増え、建築部材の一部が発見されることも多くなってきました。そして発見された建築部材から当時の家の建築材料や構造、建築技術を知ることができますようになりました。

長野市の桜田遺跡からは古墳時代の建物の建築部材が大量に出土しました。発掘現場での調査データや家形埴輪の表現、建築に関するこれまでの研究に建築部材の加工の跡の観察を加え、据立柱の建物の構造を復原することができました。

(宮脇正志)

# 原始の住まいのようす



①旧石器時代の家の想像図（島居亮画）  
旧石器時代に竪穴住居等の遺物の跡はほとんど発見されない。食料を求めて移動生活を送っていた旧石器時代の人びとは、一か所に定まった家をもたず、移動した土地で草木で葺いた簡単な小屋をつくったのだろう。

## ②岩陰での生活の復原

（絵文早晴 約8000年前 北相木村桶原岩陰遺跡  
北相木村考古博物館蔵）

千曲川の上流、相木川の渓谷にあった幅・奥行き約8mの広さの岩陰に、1000年にわたって人びとが生活を営んだ跡が発見された。

## ③縄文時代の竪穴住居

（絵文中期 約4500年前 草野市与助尾遺跡  
草野市立尖石縄文考古館蔵）

## ④土葺き屋根の竪穴住居

（絵文中期 約4000年前 富山市北代遺跡  
富山県や群馬県、岩手県では土葺き屋根の竪穴住居が確認されている。寒冷な長野県でも同じような土葺き屋根の竪穴住居がつくられたかも知れない。）

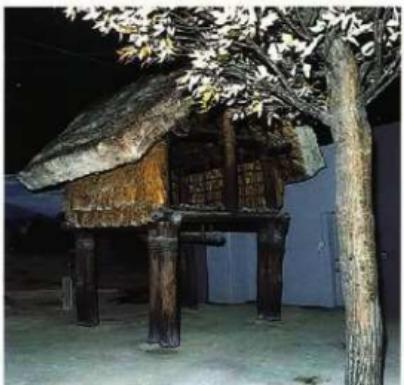
◆竪穴住居の登場  
今から一万年以前、旧石器時代から縄文時代の初めごろまでの人びとはナウマンゾウやオオツノジカ等の大型動物を追い求め移動生活をしていました。ですから定住はせず、洞穴や岩陰に住んだり、簡単な小屋をつくったりしていました。

約八〇〇〇年前ころ（縄文時代早期）になると、しっかりとした竪穴住居をつくつて小さなムラをつくって暮らすようになりました。縄文時代の竪穴住居は、地面を掘りくぼめて床を張り、室内に炉を設けて煮込み・暖房・あかりなどに用いました。屋根はカヤのような植物質の材料で葺きました。寒さを防ぐために土屋根をのせた竪穴住居もありました。

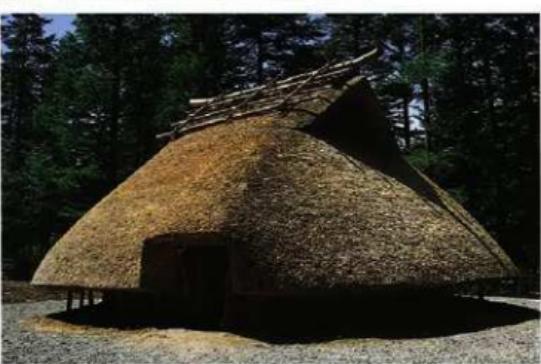
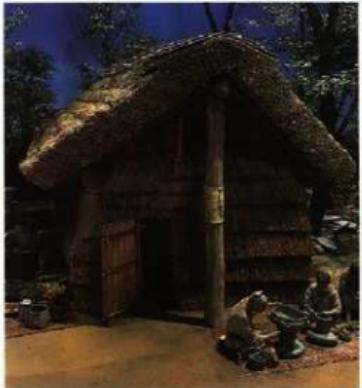
中国大陸から伝わったかまどが東日本まで普及した古墳時代になると、住居のなかの炉は壁ぎわに設けたかまどから壁の外へ煙を出す構造に変化しましたが、竪穴住居の形式は人びとの家の代表として平安時代末まで使われ続けました。

## ◆掘立柱の建物

建物には、竪穴住居の他に地面を掘りく



平石を敷いた竪穴住居跡（縄文後期 約3500年前 望月町平石遺跡 望月町教育委員会提供）  
入り口の部分が張り出している、手鉢の形に似ている。床には「鍛平石」が敷き詰められている。円形部の中央に炉がある。



縄文時代の平地住居（縄文中期 約4500年前）

新潟県立歴史博物館蔵 堀越知道提供)

新潟県塙沢町五丁歩遺跡とともに新潟県立歴史博物館常設展示室に復原された。



弥生時代の平地住居跡（弥生中期 約2000年前 長野市松原遺跡）

円形の溝が平地住居の周囲に掘られた周溝。何回も建てかえがおこなわれているのがわかる。写真の奥には同時代の竪穴住居の跡もみられる。

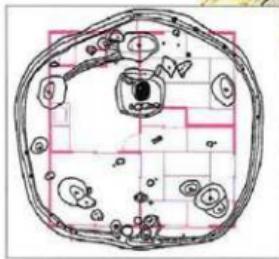
ばめない建物もありました。柱の部分だけ穴を掘り柱を立ててつくるので「掘立柱建物」とよばれています。この建物はすでに約六〇〇年前（縄文時代前期）からあつたことがわかつてきました。倉庫として使われた高床式の建物と、住居として使われた平地式の建物があります。更埴市屋代遺跡群では縄文時代の、長野市松原遺跡では弥生時代の平地住居が確認されました。原始時代の家の多くは竪穴住居でしたが、ほかにさまざまな構造の家あつたことが、ほかにさまざまなかつたことがわかつてきました。

（吉脇正憲）

# 竪穴住居内の住みわけ

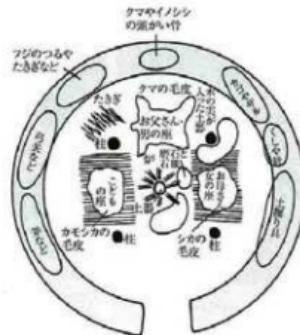
復原した竪穴住居内の住みわけ（長野県立歴史館常設展示室）

縄文時代前編（約6000～5000年前）の阿久遺跡で見つかった竪穴住居跡等をもとに復原した。炉を中心として、男の座、女の座、子どもの座を配置し、それぞれが果たした役割に応じて道具類を置いた。



竪穴住居と現代のアパートの広さ  
(茅野市埋蔵遺跡)

縄文時代中期（約4500年前）の竪穴住居（7.2m×7.0m）と3DKのアパートの平面図を重ねると、ほぼ同じ大きさになる。



◆台所の登場

古墳時代には、一齊にかまどをもつ家が出現します。それまでは炉の周囲で調理も食事もおこなわれていましたが、かまどが登場したことで、竪穴住居のなかに調理をおこなうための専用の場所＝台所のスペースができます。その脇には食べ物を貯蔵する穴が掘られ、近くに調理具や食器がまとめて置かれています。

◆祈りの場を持つ家

縄文時代の住居には、日常生活とは別に当時の信仰とかかわる場が設けられています。胎盤を納めて毎日踏むことによつて子どもの健康を祈つたとされる埋甕は入り口に、奥まつた壁ぎわには石組みの祭壇がつくられています。

◆竪穴住居内の住みわけと広さ

歴史館では、縄文時代の四人家族が住んだ竪穴住居を想定し、復原しています。現在のように壁で部屋を区切つていませんが、大きな住居になると、3DKアパートの平面図を重ねてもほぼ同じ広さであったことがわかります。当時は炉を中心にして、日常生活や生産活動または習俗・屋内祭祀等の場が決められていましたと思われます。



縄文時代の竪穴住居（豊丘村伴野原遺跡33号住居跡 酒井幸則提供）

縄文時代中期（約4500年前）につくられた竪穴住居跡である。毎日使う入り口には穴を平石で蓋をした埋甕が納められ、その脇に立石が配置されている。中央奥寄りには大きな石組みの炉を備え、さらにその奥には原壇が設けられ祭りの場が意識されている。面積が約60m<sup>2</sup>の大型住居で、特殊な使われ方をした土器である釣手土器も出土している。



復原した古墳時代の台所（塙尻市平出遺跡 塙尻市立平出博物館蔵）

かまどは熱効率が高く、胴の長い甕がかけられ、米を蒸すための甕がのせられた。

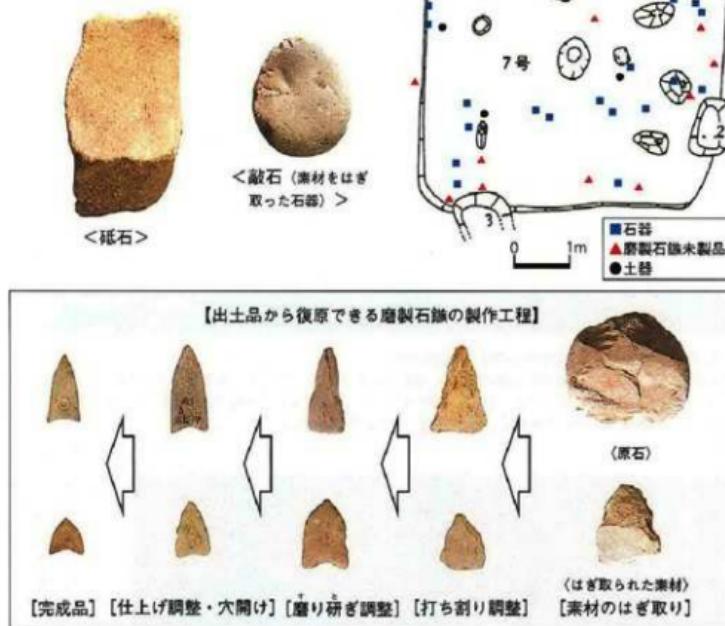


出土した古墳時代のかまどと食器・調理具  
(長野市篠ノ井遺跡新幹線地点353号住居跡  
長野県立歴史館蔵)

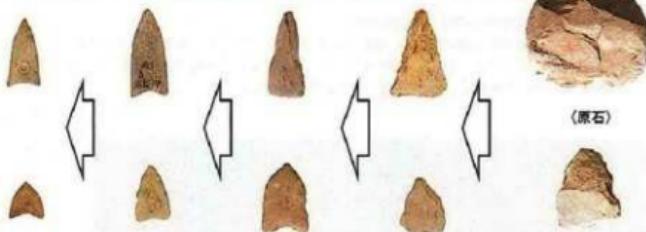
かまどにかけられた甕や周囲の調理具・食器がそのまま残されていた。

# 仕事場となつた家

磨製石鋸をつくった住居（高森町北原遺跡 下伊那教育会蔵）発掘調査された、弥生時代中期（約2000年前）の住居跡のすべてから、磨製石鋸の未完成品及び砥石・研石・台石など石器をつくる道具類が出土した。その結果、家中の中では下図のような工程で磨製石鋸がつくられていたことがわかった。



【出土品から復原できる磨製石鋸の製作工程】



【完成品】 【仕上げ調整・穴開け】<sup>†</sup> 【磨り研ぎ調整】 【打ち割り調整】

【はぎ取られた素材】  
【素材のはぎ取り】

◆浮かび上がる屋内作業のようす  
堅穴住居では作業をする場所を決め、屋内でできる仕事をしていったようです。  
高森町北原遺跡では、出土した弥生時代住居跡七軒のすべてから磨製石鋸の未完成品や製作用の道具が見つかり、原石から調整、穴開けまで工程が明らかになりました。  
丸子町社軍神遺跡では、古墳時代（五世紀前半）の住居の壁に沿って幅一〇センチメートルの床に工作用の穴が掘られ台石が置かれ、周囲に磨きかけの管玉や石屑が散乱していました。家のなかに作業場を設けていたのです。

（野澤誠二）

住居は、食事や睡眠など日常生活の場であるとともに、必要なものをつくる仕事場にもなりました。発掘調査した住居の中に残された石器などの道具類、未完成品や石屑等から、家のなかでさまざまな仕事をしていたことがわかります。原始時代には、生活に必要なものはすべて自分自身でつくらなければなりません。木をきつたり動物を捕つたりするための石器や鉄器、衣類や敷物、身を飾る勾玉・管玉などの玉類など、家のかでできる作業は、家族が協力・分担しておこなつていていたのでしよう。

## ◆仕事場でもあつた住居

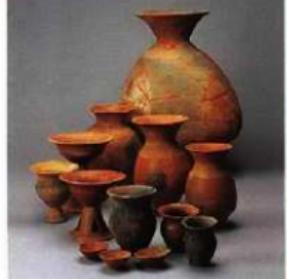
ベンガラを蓄えた土器  
(長野市松原遺跡 長野県立歴史館蔵)



#### 土器を彩色した住居

(長野市松原遺跡 長野県立歴史館蔵)

弥生時代中・後期(約2000年前)の千曲川流域を中心とした地域では、ベンガラ(酸化第二鉄)で赤く塗った土器が盛んに使われる。どうやら住居内で彩色の作業をしていたらしい。



弥生時代後期の土器群 (長野市猪ノ井 土器に赤いベンガラを塗っていた住居跡 (長野市松原遺跡 長野県立歴史館蔵)  
遺跡群新幹線地点 長野県立歴史館蔵)



#### 玉をつくった住居

(丸子町社軍神遺跡 丸子町郷土博物館蔵)

深く掘った工作用の穴の手前には大きな石が置かれている。家のなかに作業場があったことがよくわかる。

#### 出土した管玉の未完成品

(丸子町社軍神遺跡 丸子町郷土博物館蔵)

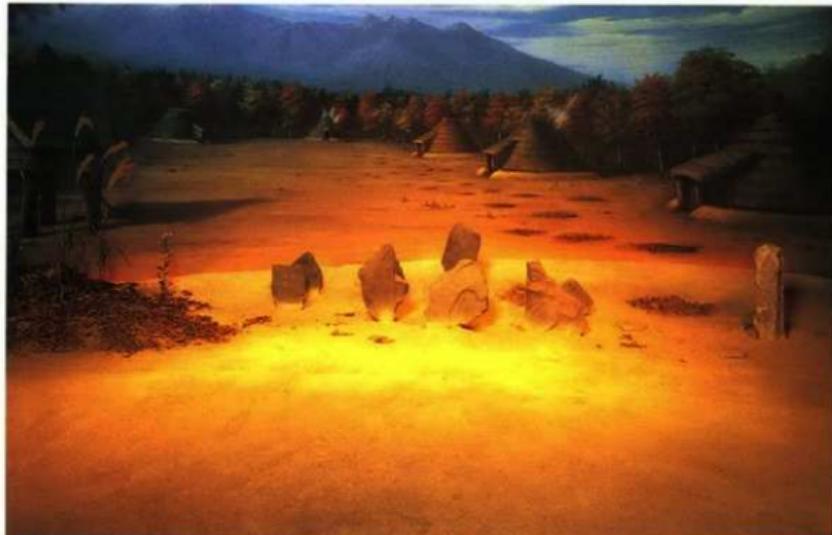


#### 敷物を鋪んだ住居

(佐久市篠毛坂遺跡群B地区 長野県立歴史館蔵)

わらなどで敷物(こも)を鋪むときに使った石のおもりが住居跡にそのまま残されていた。

# ムラの暮らし



縄文のムラ（長野県立歴史館常設展示室 原村阿久遺跡を復原）

八ヶ岳をのぞむ森林をきりひらいてつくられた縄文時代前期（約6000年前）のムラの景観を復原した。人びとが共同で作業や祭りをおこなう広場を中心として竪穴住居と高床建物が環状に並んでいる。気候の温暖化が進んで自然の恵みが豊かになると定住する生活が当たり前になって、標高1000mに近い土地にも聚落が営まれた。このムラの広場の中心には二列に並んだ列石と立石が配置され、そこが祭りの場としての機能を果たした重要な場所であることがわかる。

## ◆集落の形成

今から約六〇〇〇年前の縄文時代前期には、数軒から数十軒の家からなる集落をつくるようになります。気候が温暖化して周囲の森にはシカやイノシシなどの動物が群がり、ドングリ類、クリ、オニグルミなど木の実が豊富に実っていて、一つの場所で生活を続けることができました。森林をきりひらき、竪穴住居を建て、数十人が住むムラをつくって豊かな自然の中で暮らしました。

## ◆水田の管理と戦いへの備え

弥生時代は本格的に農耕が始まった時代です。人びとは、水稻耕作に適した河川沿いの湿地に水田をきりひらき、自然堤防の上にムラを移して、農地と農作物を管理し守るために、水田の近くで暮らすようになります。

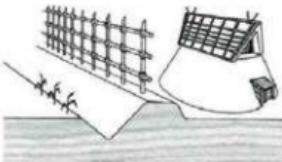
豊かな生産を保証する農地はほかのムラとの争いを生みました。そこで、ムラを取り囲む深い溝を掘り、柵を建てる、守りの機能を持つたムラが各地につくられました。

## ◆権力者のいるムラ

古墳時代になると、地域を支配する有力

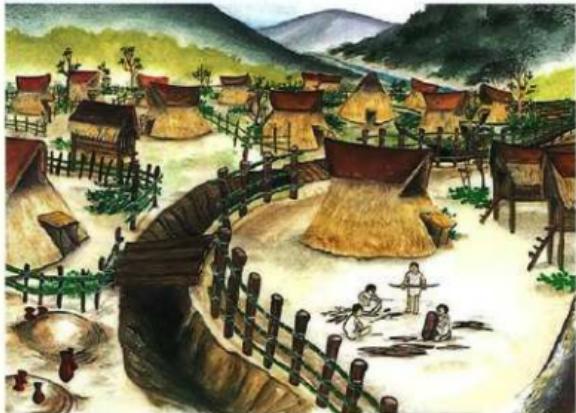


稻作のムラ（長野市春山日温跡をもとに復原）  
千曲川によって運ばれた土砂が積もって自然堤防ができる。人びとはその上にムラをつくり、まわりの低湿地（後背湿地）に水田をさりひらいて壁穴住居数棟で小グループがつくられ、生活をしていた。



守りのムラの構造

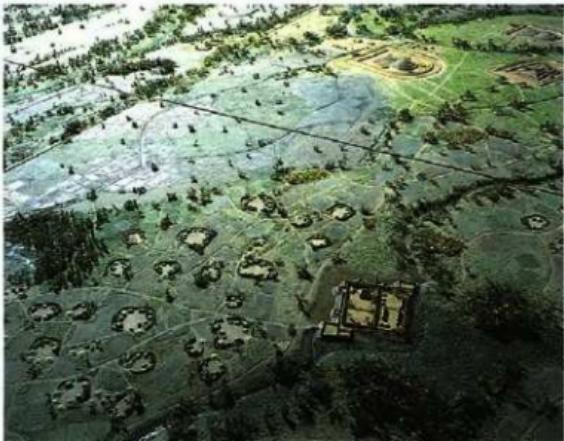
戦いへの備え（長野市松原遺跡をもとに復原）  
弥生時代中期の大盛落を、幅約3m、深さ約1.5mの断面V字型の溝で囲んでいる。松原遺跡ではこのような大きな溝と柵によって外部と隔てられた空間にムラをつくった。人の通行を妨げるような溝を掘るのは、ムラを守るために備えたと考えられる。



#### 権力者のいるムラ

（群馬県群馬町三ツ寺遺跡・保渡田古墳群等を復原  
かみつけの里博物館蔵）

古墳時代には強力な権力者があらわれるので、ほかよりも格段に大きな幅広い堀と石垣に囲まれた館がつくられた。その周囲にかれを支えた人びとのムラと水田・畑地が広がり、少し離れて力に見あった大きさの前方後円墳がつくられる。



者（やまと）の館や古墳をもつムラがあらわれます。  
豊かな農業生産を背景として、大きな力をもつ権力者を中心としたムラがつくられます。

（井澤義一）

# 家を建てる道具

豊富な木材資源に恵まれた日本では、定住を始めた縄文時代から木を材料とする建築がつくれられ、その道具や技術も発達してきました。家を建てる道具の移り変わりを見てみましょう。

(宮脇正実)



縄文時代の磨製石斧  
(縄文前期 約5000年前 棘つきの石斧は復原複製 長野市松原遺跡 長野県立歴史館蔵)



12000～13000年前の石器  
(南筑紫村神子浜遺跡 林茂樹蔵 上伊部郷土館保管 重要文化財)



弥生時代中期の石斧のセット  
(大阪府池上遺跡出土から複製  
竹中大工道具館蔵)



弥生時代後期の鉄斧  
(上田市浦田B遺跡 上田市立信濃  
國分寺資料館蔵 大阪府立弥生文  
化博物館提供)

## ②石斧から鉄斧へ—弥生・古墳時代—

弥生時代の中ごろから後半にかけて、中国大陆から金属器が伝わり、石斧から鉄斧への変化が起こりました。鉄斧は石斧に比べてじょうぶで切れ味が鋭く、複雑な木材加工ができるようになりました。大型鉄斧は縱斧として伐採・製材用に、小型鉄斧は横斧として部材加工用に使われ、槍鉋(鉤)・鉄鎧も使われるようになりました。

古墳時代には、鉄斧や鉄鎧の構造が強固になり、槍鉋も大型化し、鉄製の鎧も登場するなど、道具の種類も増えてきました。

## ③道具の確立と大鋸の登場—古代・中世—

古代になると、大陸から伝来した仏教寺院建築によって高度な建築技術が定着・普及していきました。それともなって、建築用の道具も種類が増え、用途に応じて使い分けられるようになりました。

さらに、中世にはそれまでなかった縱挽きの大鋸が中国から伝わり、建築用板材をさまざまな木から効率よく生産することができるようになりました。

## ①石斧の発達—縄文時代—

金属の道具が発明される以前、木をきったり、加工したりする道具は石製のものが中心でした。縄文時代前期（6000～5000年前）になると気候の温暖化とともに大木のしげる森ができ、太い樹木を伐採したり、加工したりすることが盛んになりました。これに応じて石斧の種類や数も増加し、磨かれた刃も両刃と片刃に分けられ、斧の形も縱斧・横斧があらわれました。

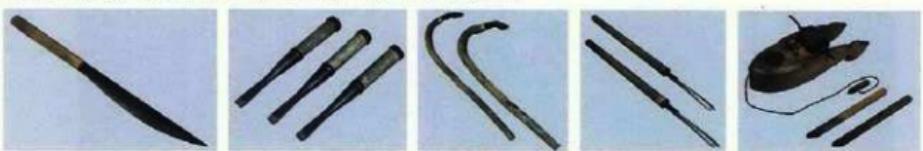
弥生時代になると、伐採用には縱斧、加工用には横斧というように用途に応じて使われるようになりました。



紫金山古墳出土の鉄製工具（4世紀）の復原複製  
(大阪府立近づ飛鳥博物館蔵)



鎌倉時代の建築工事場面（『春日山権現鏡記絵巻』 模本 東京国立博物館蔵）



a 鋸  
大鎌が登場する以前の鎌は横挽き専用で、木の葉形をしていた

b 筍  
板材をとるときに、木目にそって板に割る道具。両刃でくさびの役割をする

c 手斧  
板の表面を荒削りする道具

d 檫鉤・(鉤)  
板の表面の仕上げる道具

e 黒墨  
建築部材に長い直線を引く道具

絵巻に登場する鎌倉時代の大工道具（複製 長野県立歴史館蔵）



室町時代に普及した「大鎌」

(兵庫県石峯寺伝来品の複製 竹中大工道具館蔵)

大鎌挽きのようす  
(金成山古絵図 岡山県西大寺観音院蔵 岡山県立博物館提供)



近代における改良（「両刃鋸」と「二枚刃台鉋」）  
(竹中大工道具館蔵)

#### ④大工道具の完成—近世・近代—

江戸時代初めに台鉋が伝わり、大工道具が出そろいます。また、職人による仕事の分業が進み、それぞれが専用の道具を使うようになりました。

明治時代以降、さらに職人の分業が進み、木材建築に関する加工の精度は最高の水準に達しました。当時の一人前の大工が使う道具は約180点にもなるそうです。しかし現代になると電動工具が普及し、日本の伝統的な大工道具は次第に衰退していきました。

# 川とともにある住まい



更埴市屋代・雨宮地区的景観（更埴市屋代遺跡群・更埴条里遺跡）

千曲川に沿って集落のある地域が自然堤防の地形で、多くの遺跡が集中しており、屋代遺跡群とよばれている。集落のない水田の地域が後背湿地の地形で、弥生時代以来の水田跡などの遺跡が地下に存在し、更埴条里遺跡とよばれている。

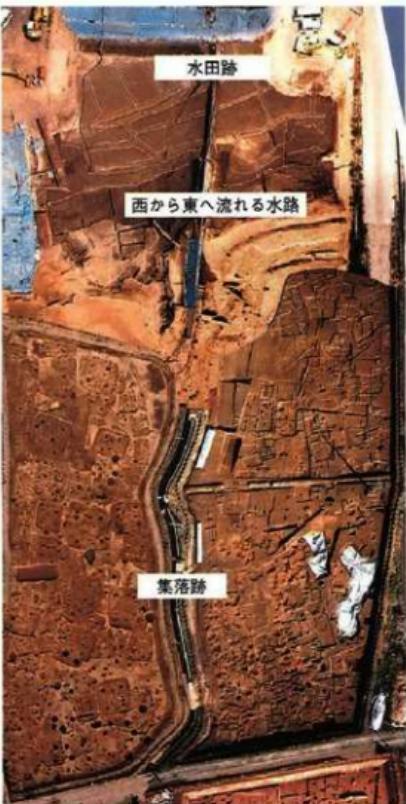
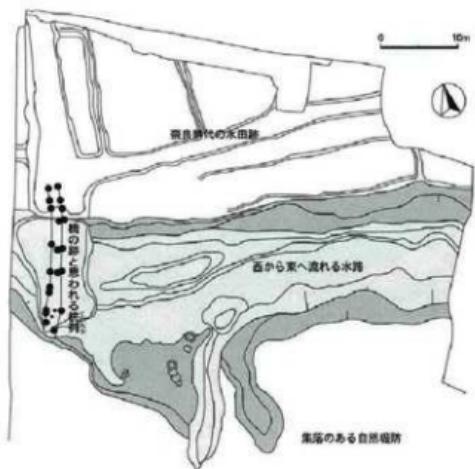
## ◆川がつくり出す地形

大きな川が平地をゆったり流れるところでは、流路に沿つて土砂が河岸に堆積した自然堤防とよばれる微高地や、その背後に広がる後背湿地とよばれる平地がみられます。これらは長い年月の間に川の流路の変化、洪水、上流から運ばれてくる土砂の堆積などによってつくり出された地形です。

### ◆川沿いの暮らし

現在でも、水が得やすい後背湿地は水田などとして利用され、また洪水などのときには、家が建てられ集落が形成されています。このような川の近くの地形を利用した生活は、遺跡の発掘調査によつて古くからおこなわれてきたことが明らかになりました。後背湿地などでは水田の跡などを見つかっており、自然堤防上には竪穴式や掘立柱の建物の跡がたくさん見つかっています。

遺跡からは、水辺で祭祀をおこなつたり、魚などを獲つていたことを示すものも見つかり、人びとがたびたび洪水の被害をうけながら、川の恵みとともに暮らしていたようすをうかがうことができます。（伊藤伊さ



飛鳥～平安時代の集落と水田（更埴市屋代遺跡群）  
集落跡にみえるくぼみや穴は建物、柱、炉などの跡。

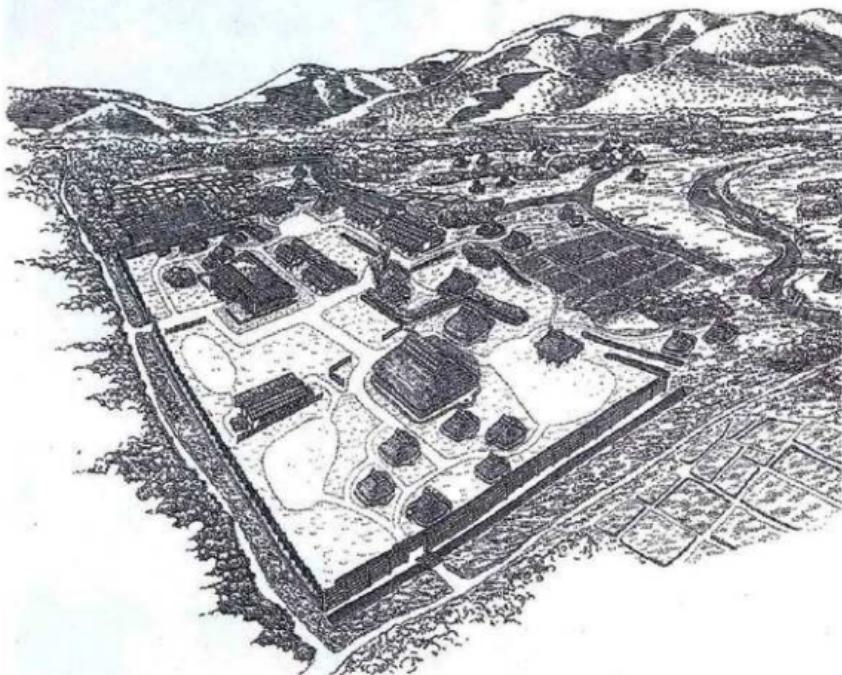


左：更埴市屋代遺跡群から出土した祭祀具や土器  
右：網を縫う網針

（長野県立歴史館蔵）



# 富裕農民の住まい



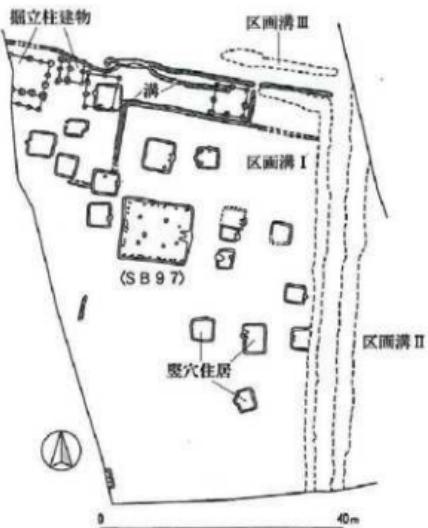
松本市下神遺跡の推定復原図（長野県立歴史館蔵）  
9世紀なからころの遺構図を参考にして描いた。

## ◆大きな竪穴住居の出現

松本市神林にある下神遺跡から平安時代初期の住居跡が見つかっています。それまではほぼ同じ規模の竪穴住居が成り立つてゐた村のなかに、大型掘立柱建物や礎石（土台石）という新しい工法を取り入れた一〇メートル四方もある大型竪穴住居が出現しました。ここから大甕が出土したり鍛冶や厨房の施設などがあることから、倉庫や作業場を兼ね備えた富裕な農民の住まいと考えられます。大型竪穴住居を取り囲むように一辺四丈前後の小型住居が配置され、集落は柵をともなう溝によって区画されています。

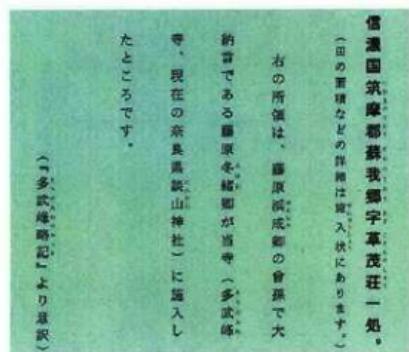
## ◆富裕な農民は莊園の指導者

富裕な農民と関係の深い住宅や溝などから、灰釉陶器や綠釉陶器をはじめたくさんの土器や陶器が出土しました。そのなかに文字の書かれた土器があり、「草茂」と書かれた土器がありました。これは富裕な農民が「草茂庄」という莊園の指導者であることを教えてくれました。多くの農民が貧しい暮らしをしていましたが、一方では富有的な農民は一一から一二世紀、武力をたくわえて領主になつていつたのです。



松本市下神遺跡の遺構図

(長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書6より作成)  
9世紀なかばころの大型竪穴住居を中心とした集落



「多武峰略記」にみえる「草茂庄」(長野県立歴史館蔵)

鎌倉時代はじめに編さんされた大和國多武峰寺の寺誌。

下神遺跡から「草茂」の墨書き土器が出土したことにより、  
ここが「草茂庄」であることがわかった。

墨書き土器 (長野県立歴史館蔵) 村での文字の使用を物語る。



松本市下神遺跡（北部I・II地区）の発掘状況

(長野県立歴史館蔵)  
1985～1986年に発掘調査がおこなわれた。南上空から撮影。



富裕農民の竪穴住居

(長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書6より作成)

S1～4は主柱を支える礎石。S5・6はかまどわきの支柱を支える礎石。  
石敷き施設は水場として使用したのではないか。壁に沿って石が並べ  
られている。鍛冶施設の跡もある。



「雨」(松本市下神遺跡) 「草茂」(松本市下神遺跡) 「南殿」(松本市下神遺跡) 「万」(塙尻市吉田川西遺跡) 「財富加」(塙尻市吉田川西遺跡)

# 門前町のにぎわい



諏訪下社門前の浴湯「總之湯」

宿場の中央にある浴湯。湯船のまわりには壁がない建物で、そのまま往来の道に面している。



「諏訪社遊楽図屏風」(右隻 個人蔵)

上社神宮寺と門前町のようす。境内の桧皮葺きや瓦屋根の建物に対して門前町の板葺き、茅葺きの家いえのようすがわかる。



諏訪上社門前の人形屋

店の前に女たちが赤い人形を見ている。ほかの商店にも台にのせられたさまざまな品物が並んでいる。

◆復原された善光寺門前

大きな神社や寺院の門前にはどのような家いえが建っていたのでしょうか。  
門前町の風景は、古文書や発掘された遺跡のほか、絵に描かれた資料によつて知ることができます。

絵にみられた家いえは、どのくらいの大きさだったのでしょうか。歴史館に復原された「鎌倉時代の善光寺門前」で体験してみましょう。

棚店とよばれる商店や、市の立つ日にだけ品物を売る在宅など、実際に入ってみると小さいことがわかります。壁も板を並べて張つたり、「網代編み」にしたものでした。風が通り抜けやすいので冬はきっと寒かつたにちがいありません。

## ◆諏訪社門前のようす

四〇〇年前のようすを描いたとされる「諏訪社遊楽図屏風」から諏訪上社・下社の門前のようすを見てみましょう。

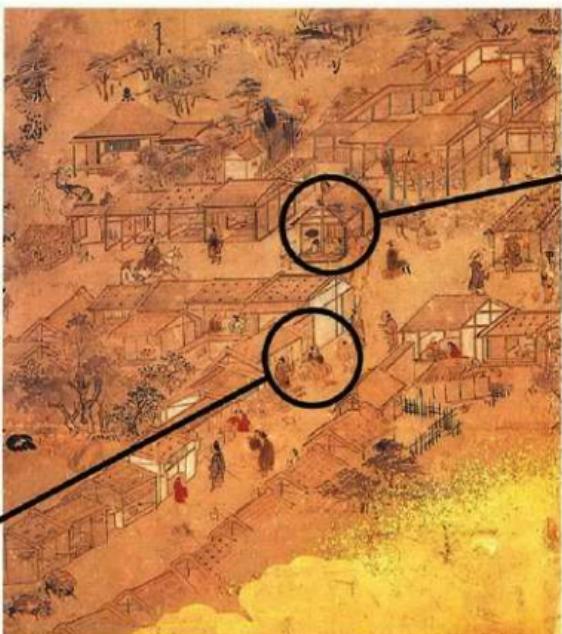
神社境内の桧皮葺きや瓦屋根の立派な建物とは異なり、門前には石を置いた板葺き屋根や茅葺き屋根の庶民の住まいが並んでいます。上社門前には人形を売る店もみえ



復原された棚店（長野県立歴史館常設展示室）  
絵には歴史館にある棚店と同じような建物が描かれている。入口にのれんをかけたり、品物をつるすようすがみられる。



諏訪下社門前の米屋  
宿場の中央にある米屋には米俵がいくつも積まれ、地面にはそろばんや硯が置かれている。白壁の建物は大きく、奥の座敷では酒をのむ人物の姿が見える。



「諏訪社遊楽図屏風」（左隻 個人蔵）  
宿場町としてにぎわった諏訪下社門前のように。



復原された善光寺門前の建物（長野県立歴史館常設展示室）  
善光寺の参道に面してさまざまな種類の建物が並んでいる。絵と同じように板葺きに石を盛いた屋根や茅葺きの建物に実際に入ってみよう。

ます。  
下社門前では壁のない浴場で温泉につかる人びと、繁昌している米屋など、宿場としてにぎわった下諏訪宿のようすがわかります。  
(伊藤洋子)

# 戦国人の住まい



大井太郎の館（「一遍上人繪伝」複製 長野県立歴史館蔵  
国宝）

一遍上人は高念仏を小田切（臼田町）で開始した。その足で大井氏の館に出向く。板葺の屋根と床が見える。床がはれているのは高念仏で人びとが激しく踊ったためである。



復原された朝倉館の模型と平面図（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館提供）

越前國（福井県）の戦国大名だった朝倉義景の館である。約120m四方の方形の館は室町幕府將軍や管領など都の建築によく似ている。下図は平面図。



高梨氏館跡（庭より常御殿を見る）

中世の京風庭園を主殿方面からながめる。高梨氏は京の文化人三条西実隆との交流もあった。京都の文化を取り入れる地方の武士の住まいを物語る。

◆庶民の住まい

庶民の住まいは武士の館ほど立派ではありません。伊那市の菖蒲沢跡や、佐久市黒岩城周辺などからは戦国時代の堅穴住居がたくさん見つかっています。紀伊国（和歌山県）「粉河寺縁起」にみえる半地下式の家や地面に丸太をねかせその上に床を張る簡単な床のある住居「軒がし根本」が庶民の住まいと考えられます。

（村石正行）

## ◆武士の住まい

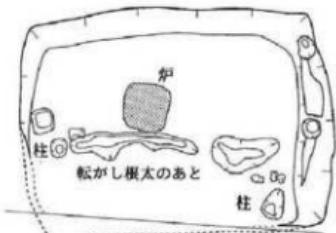
武士の住まいを館といいます。「一遍上人繪伝」には佐久の大井太郎という鎌倉時代の武士の館が描かれています。屋根は板葺きで、縁側は濡縁になっています。

戦国時代、中野地方に勢力をはつた高梨氏の館が発掘されています。堀と土塁に囲まれた敷地は東西約一三〇メートル、南北約一〇〇メートルの長方形です。敷地内には建物や庭園などがあります。建物は接待用の「晴の場」である主殿と、普段の生活空間である常御殿とに分かれています。主殿は会所ともいい、庭を前にしての儀礼もおこなわれました。これは都の将軍の邸宅をまねており、同様の一乗谷朝倉館（福井県）も有名です。

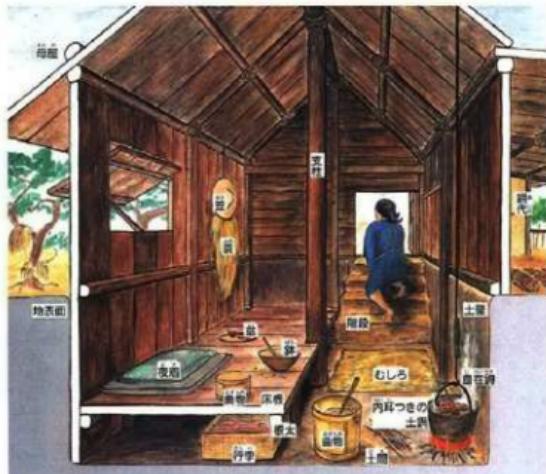


竪穴住居から顔を出す（「粉河寺縁起」 粉河寺蔵 小学館提供 国宝）

半地下式の家屋から上半身を乗り出している男。垣根で家屋を囲んでいるようすもみえる。右下図は内部の想像図。土間に丸太や石を置いてその上に簡単な板を張り、床にしている。



黒岩城付近の竪穴住居（佐久市教育委員会提供）  
中央横に丸太をねかせてその上に床を張った半地下式の住居跡が見つかっている。



（原図 藤原聰 「日本歴史館」）

# 寺院や館をいろどつた中世の庭園



現在の開善寺庭園と開善寺境内古図に描かれた庭園

(飯田市開善寺跡)

創建当初の開善寺の庭園がどのような姿であったのかはよくわからないが、次第に十割にふさわしい美しい庭園に整備されていったと想像される。

江戸時代に描かれた古図と現在の庭園からその一端がしのばれる。



## ◆清拙正澄と開善寺

南北朝時代に京都五山（禅宗の中心寺院）

で活躍した夢窓疏石が幽幻な日本庭園の様式を完成させました。五山僧は中国大陸との交流でも大きな役割を果たしました。

飯田市の開善寺は、夢窓疏石と同時代に元から来日した清拙正澄によって開かれた大規模な禅寺です。室町幕府にも保護された十刹（五山に次ぐ寺院）にも列せられました。境内には創建当初からの山門も残り、かつての広大な境内とそのなかの庭園をしおぶことができます。

## ◆高梨氏館跡庭園と仏法紹隆寺庭園

中野市の高梨氏館跡には、戦国時代末までここに居住していた高梨氏の庭園が発掘されています。庭園は館と一緒に化し、庭園が書院の座敷飾りとともに客人をもてなし、自らの権威を示す会所として、上級武士にとつて重要な施設であつたことがうかがえます。

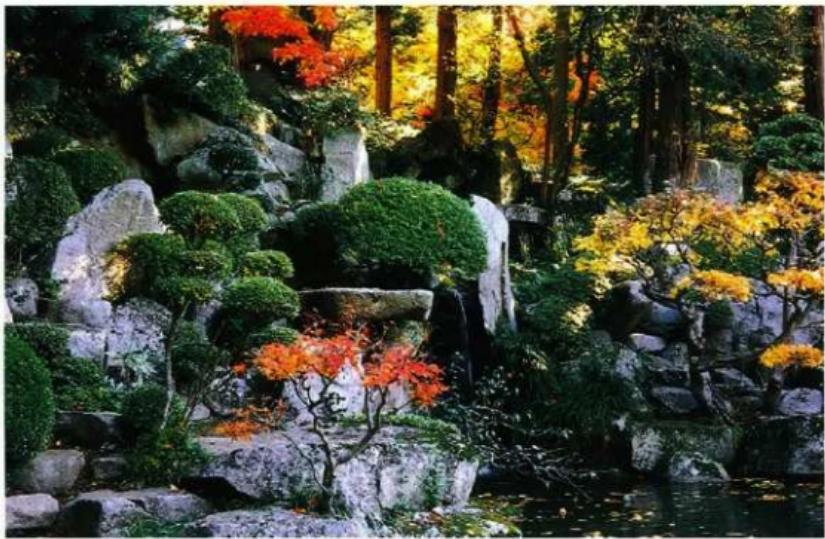
諏訪市の仏法紹隆寺庭園は安土桃山時代につくられた庭で自然地形を巧みに利用した豪快な庭園です。幽幻な雰囲気を重んじた五山の庭園とは異なつたおもむきが時代の変化を感じさせます。

（井津宗伸）



高梨氏館跡庭園（中野市）

周囲約100mの塀をめぐらした方形の敷地の南側部分に庭園跡がある。石組みの中の大きな庭石は持ち去られていると思われるが、中世領主の庭園跡として全国的にも稀な存在である。



仏法紹隆寺庭園（高知市）

仏法紹隆寺の庫裏の裏にある庭園。抵崖を利用した豪快な石組みが特徴で安土桃山時代から江戸初期の間につくられたと考えられている。

# 住まいを「かこむ」形の変化

## 1. 家やムラをかこむ

わたしたちの住まいを「かこむ」という考え方では、すでに5000年前の、縄文時代の竪穴住居で見ることができます。

写真①では、直径約5.5mの竪穴住居をかこむ幅2~3mの「周堤」が、盛土として見えます。雨風の侵入を防ぎ、屋根を支える材を地面に固定しやすくするために盛られたと考えられます。2軒の竪穴建物を一重のほりで約40~70mの弧築形にかこんだ溝(環濠)が設けられる例もあります(写真②)。

約2000年前の弥生時代の中ごろから、住居群を一重もしくは二重、三重のほりで長径約200~300m、短径約100~200mの精円形にかこんだ「環濠集落」がつくられるようになります。ほりの外周には、ほりを掘った土を盛って土手(土壘)をめぐらします。外からの脅威に対して、集団で防衛しようとしたようです(写真③)。

弥生時代の終わりごろになると、経済的・軍事的に力をもった個人が住む建物だけを、ほりと柵や板塀でかこむ「居館」がつくられるようになります。環濠集落はなくなっています(写真④・⑤)。



④古墳時代の居館(古墳時代中期 5世紀後半  
前橋市丸山遺跡展示館 群馬県教育委員会提供)  
東西約57m・南北約30m。ほり幅約2.5m。深さ約1m。ブリッジは確認されていない。同時期の8軒の竪穴住居をかこんでいる。



⑤領主の居館(鎌倉時代 14世紀初め「法然上人繪伝」巻一 知恩院蔵 国宝)  
美作国(岡山県)、法然の父、法時院の館の描写。建物群のまわりを、ほり・垣根・柵・門でかこんでいる。



①竪穴住居周堤(縄文時代中期 約4600年前 貝塚市  
屋代遺跡群 長野県立歴史館蔵)

周堤高さ、約30cmの竪穴住居の縁に沿って一周していた。床面からの高さは、1.2mにおよぶ。



②環濠(縄文時代後期 約4000年前 吉小牧市静川16遺跡  
吉小牧市埋蔵文化財調査センター提供)

ほり幅2~3m、深さ1~2m。集落部はほりの城外にあり、ほりでかこむというよりは儀式の場を区切る意図が想定される。



③環濠集落(弥生時代中期 1世紀後半 横浜市大塚遺跡  
横浜市埋蔵文化財センター提供)

長径約210m、短径約130m。ほりの深さが2m、土手の高さが2mで、かこみの総高は4mに達する。ほり幅も4~4.5m。



⑦中世の居館【その2】(室町時代 15世紀後半 佐久市伴野氏居館跡  
幕史跡(右)・前山城跡(佐久市史跡(左))

東西約80m、南北約110m。土堀と石垣で構成されている。館の起源は、鎌倉時代前期までさかのぼる。室町時代後期、千曲川の支流をはさんだ西2.5kmの山手に前山城を築くとともに居館の周囲も規模を拡大した。



⑧姫路城下図・文化三年八月改(部分)

(兵庫県立歴史博物館蔵)

外曲輪東西1.6km、南北2km。18世紀中ごろの整備のようすを描いている。



⑨姫路城(姫路市広報広聴課提供)

上空から内曲輪、中曲輪および外曲輪の一部を写す。17世紀初めに大改修され、現在まで城郭建築の構成をよく伝えている。



⑩中世の居館【その1】(室町時代 15世紀前半 大町市美濃氏居館跡 大町市教育委員会提供)

東西約50m、南北約55m。はり幅2.5~5m。深さ0.8~1.4m。この居館の本拠地跡が北方500mの場所に東西・南北とも約80m、二重ばかりの規模で確認されている。

⑪松本城下町絵図・草保十三年秋改(部分)

(松本城管理事務所蔵)

外曲輪(外堀でかこむ内側スペース)東西・南北とも約700m。外堀の外側にもつくられた城下全体の規模は、東西0.9km、南北4.4km。16世紀末に築城され、17世紀中ごろこの規模に拡大した。



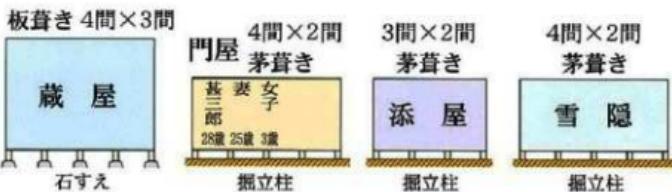
## 2. 館や城をかこむ

地域の有力武士たちは、日常生活の拠点を平地に置き、いざというときには戦えるように、はりと土壘による小規模な山城を築くようになります(写真⑥)。戦国時代、戦いが増えるにつれ、建物を土壘や石壘、はりでかこんで、住まいと防衛をかねた城館をつくりました(写真⑦)。

戦いに勝ち残った戦国大名は、たくさんの軍勢を収容する広くて平らな場所を必要とするようになり、平らな地に城郭を構えるようになります。秀吉の朝鮮出兵にしたがった大名たちは、朝鮮半島で築いた城や国内の城建設でたくわえた技術と経験を生かして、土壘と石垣、堀と櫓と門で構成された城「惣(総)構」というかこいを築きました。かれらの住む館を中心に武士や町人を住ませ、政治・軍事・経済・文化の総合都市である城下町ができました。「かこむ」意識の完成したたちのひとつが城下町といえるのではないでしょうか(写真⑧・⑨・⑩)。

(白沢勝彦)

# 村人の家と生活



◆江戸時代の村の建物

江戸時代の初めの一六五四年（承応三）、佐久郡の原村（佐久市）には、一五軒の本百姓と一四軒の小百姓がいて、広い屋敷地をもつ薬師寺がありました。

本百姓のなかには、母屋のほかに、別棟の座敷・蔵屋・門屋などをもつものもいました。このころようやく、柱の根元に石をえ、屋根を板葺きにする建物がつくられるようになってきました。座敷は村じゅうで五棟、蔵屋は三棟しかありませんでした。

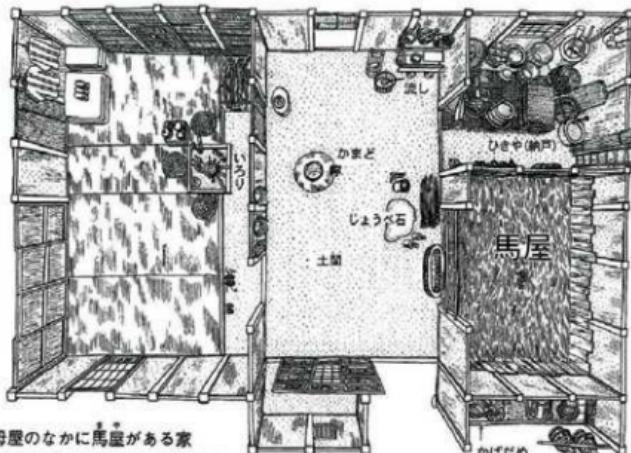
◆本百姓と小百姓

庄屋をつとめていた五郎右衛門の屋敷地は広大で、石すえ・茅葺きの母屋に、家族七人と馬二頭が生活していました。中規模の本百姓である仁左衛門の屋敷内には、や小ぶりですが五郎右衛門家と同じ数の建物がありました。ただし、母屋・門屋・添屋などは、掘立柱の茅葺き屋根でした。忠兵衛は、小さな母屋と雪隠を畠のすみにつくり、家族五人と馬一頭で生活しました。

本百姓のなかには、母屋のほかに、別棟の座敷・蔵屋・門屋などをもつものもいました。このころようやく、柱の根元に石をえ、屋根を板葺きにする建物がつくられるようになってきました。座敷は村じゅうで五棟、蔵屋は三棟しかありませんでした。

江戸時代の初めの一六五四年（承応三）、佐久郡の原村（佐久市）には、一五軒の本百姓と一四軒の小百姓がいて、広い屋敷地をもつ薬師寺がありました。

本百姓のなかには、母屋のほかに、別棟の座敷・蔵屋・門屋などをもつものもいました。このころようやく、柱の根元に石をえ、屋根を板葺きにする建物がつくられるようになってきました。座敷は村じゅうで五棟、蔵屋は三棟しかありませんでした。



母屋のなかに馬屋がある家  
(長野県立歴史館常設展示室内に復原)



1654年(承応3)佐久郡原村「人別帳」(佐久市 野澤庵夫藏)

## 忠兵衛家 (小百姓)

畠地に家作...

母屋 4間×2間  
茅葺き

本妻 母弟 男 男子 (馬)  
31歳 27歳 57歳 25歳 1歳

掘立柱

雪隠 1間×1間  
掘立柱 茅葺き

注 建物の四角は、高さではなく広さをあらわしている。3間×2間の建物は6坪で、疊12枚ぶんになる(1間は約180cm)。

5間×3間  
母屋 茅葺き

## 仁左衛門家 (本百姓)

屋敷地102坪  
下人1人(女子)

掘立柱

本妻 長嫁 二三四  
人 男 男 男 男 (馬)

57 51 15 15 15 9 5  
歳 歳 歳 歳 歳 歳 歳

## ◆門百姓と下人

本百姓の屋敷内には、「下人」とよばれる名の家がありました。ここには、「門屋」とか「門百姓」とよばれる身分の家族が住み、主人の田畠を耕作していました。五郎右衛門家のなかの甚三郎の家族、仁左衛門家の弥右衛門や茂右衛門の家族がそれで、自立した生活はできませんでした。

本百姓の屋敷内には、「下人」とよばれる奉公人も住んでいました。かれらは家族いつしょの生活ができず、それぞれが單身で奉公先に住みこみ、主人の指示をうけて仕事をしていました。

### ◆身分と建物のちがい

掘立柱の雪隠はどこの家にもありました。が、その規模はすいぶんちがいました。五郎右衛門家の雪隠は、門屋や添屋ほどの広さでした。ここは、農作業に使う道具や、きまつた季節にだけ使われる物などをしまつておく物置としても利用されました。ひとつの村に住む村人にも貧富の差があり、建物の数・造り・広さや生活のなかに大きなちがいがありました。

# 城下町の家並



松本城下町割図（江戸時代後期 長野県立歴史館蔵）

3間～6間（1間=約180cm）の間口をもった家が多いことがわかる。

## ◆武家の住まいと町人の住まい

松本では武家と町人の居住地は、別に設けられていました。大名の転封によつて、家臣は大名とともに移動します。家臣は、身分や役職に応じて武家屋敷が与えられました。今でいう官舎です。また町人の住まいは女鳥羽川の南側に設けされました。

### ◆町屋の住まい

元禄年間（一六八八～一七〇四）の松本の絵図を見ると、三間から六間（一間=約180cm）の間口をもつた家が多いことがわかります。間口というのは、通りに面した家の幅のことです、一間あたりいくらくらいの税金がかけられました。また、家と家の間に一筋ほどの溝が設けられ、家の境となっていました。人口が密集した城下町では、ゴミの処理が大きな社会問題でした。各家の裏にゴミ穴をつくり、ゴミを捨てていたのです。飲み水などの生活用水はどうしたのでしょうか。松本の城下町では一七世紀前半までは、井戸水を離れた場所から汲んできていましたが、一七世紀後半からは、木桶や竹筒で各家まで上水道を引いてくるようになりました。

## 城下町松本の配水



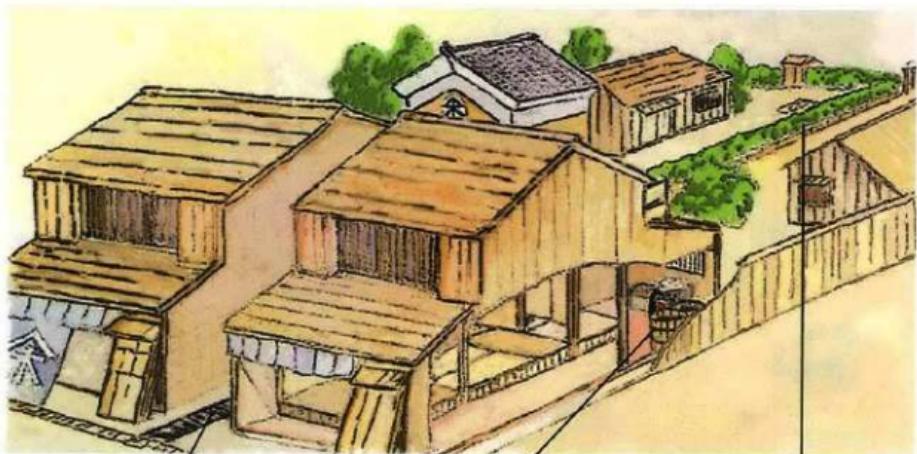
①木桶と木桶をつなぐジョイント  
(継ぎ手)

②竹管(竹の水道管)

③水を一時ためる桶

井戸水を①木桶で町屋の近くまで引き、②竹管で水を引き込んだ。直角に導水する必要がある場合は、③水をいったん桶にため、配水した。

## 城下町松本の町屋再現



埋設桶

上の桶は地面に穴を掘って設置し周囲に粘土をはって水分が漏れないような工夫がされていた。

家と家の境

家と家の間には1mほどの溝が設けられ、糞の境となっていた。



ゴミ穴

各家の裏にゴミ穴をつくり、ゴミを捨てていた。下駄、木桶、はし、欠けた焼き物、魚の骨などさまざまなものが捨てられていた。

(写真はすべて、松本市立考古博物館提供)



# 宿場のようす



海野宿（東部町本海野）

北国街道の宿場。道の真中を水路が流れる。格子戸のある二階建ての旅館が続く。

## ◆旅する人びと

江戸時代、人びとはさかんに旅をしました。人びとは旅をするとき、宿場で休んだり、宿泊したりしました。そのため、宿場には本陣・脇本陣、問屋・旅籠屋、茶屋などがありました。宿場町には正式の宿場町とそうでない間の宿があり、そこには本陣や問屋はありませんでした。

本陣・脇本陣は、おもに大名や武士たちが泊る特別な旅館でした。問屋は、宿場ごとに荷物を継ぎ送りする中継ぎ運送店でした。問屋が本陣などを兼ねることもありました。

## ◆にぎわう旅籠屋

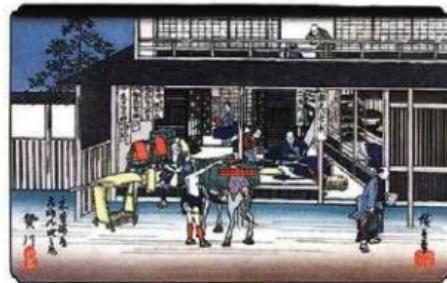
一般の人びとは、旅籠屋に泊ることがふつうでした。木造で二階建てが多く、土壁と格子戸、障子や襖などが敷かれています。部屋には畳や筵などが敷かれていました。上のふたつの写真は、海野宿のようです。街道の両側に旅籠屋や商店が並んでいました。行きかう人たちのにぎわう声がきこえてきそうです。

（原田　幸）



据卯建のある海野宿の家並

建物の両側にある屋根のついた脇状のものを据卯建<sup>さくもじだん</sup>という。もともとは火事のとき、証換<sup>あかんかう</sup>を防ぐためにつくられたが、後には飾りとなった。



にえかわ  
賀川宿旅籠の店先（「木曾街道六十九次之内 賀川」歌川広重 長野県歴史館蔵）

一般の人は旅籠屋に泊った。二階建てが多く、格子戸と障子張りの部屋だった。



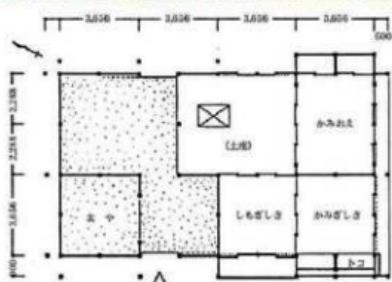
下諏訪宿場のにぎわい（「木曾路名所図絵」長野県歴史館蔵）  
甲州街道と中山道が合流する下諏訪宿は、温泉もあり大変なにぎわいだった。

# 民家の間取りと部屋



小松家住宅（塩尻市片丘　重要文化財）

17世紀末の建築と推定され、土間・土座の部分が広く、馬屋が屋内に設置されている。上座敷・上おえは、18世紀前期に増築された。



◆掘立柱・土間の家  
筑摩郡下波多村（波田町）の一六四五年（正保二）の「家帳」によると五三軒のうち三四軒が二〇坪（約六六平方メートル）以下でした。地域によって差がありますが、江戸時代前期の農民の家は、二〇坪未満の小規模住宅が大部分でした。柱は根元を焼いて地中に埋める掘立柱、壁はわらなどを芯にした土壁でした。

部屋は、だいどころ（土間）や馬屋が屋内にあり、居間・客間・寝間などの床板を張らず、土間にわらを敷きこみ、その上に筵を敷いただけの土座が大部分でした。

◆石据柱・板敷きの家

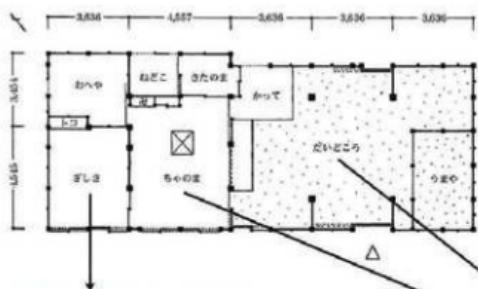
一七世紀中ごろから、有力農民のなかには、礎石の上に立てた石据柱・板葺きの屋根、板敷きの間の家を建てるようになります。座敷・上座敷・中の間などの部屋がつくられ、部屋数が増えました。なかには、畳敷きの座敷や隠居部屋のある建物を、母屋の離れとして建てるものもありました。

一八世紀後半になると、中・下層農民の家でも、そのひと間を座敷にするものも、多くなりました。



春原家住宅（東郷町和 重要文化財）

17世紀なかばないし後期に建築されたと推定される上層農民の住宅。外に面した戸口が、少なくつくらられている。おへや・ねどこ・きたのまなどの小部屋が裏側に設けてある。



#### 座敷

客間として使われた部屋で、質素な形式の床の間が設置されている。柱が鉛を使って仕上げられているのは、この座敷ばかりだけである。



#### 台所（土間）

広い土間に独立した4本の太い柱が立ち、正面中央に馬屋が設置されている。



#### 茶の間

居間として使用された部屋で、大きな畳や襖は設けてある。建築直後は、床板を張らずに土座とし、板戸のかわりに襖を使つた。左手のタンスの上に仏壇、右手板戸の上には神棚がある。

# 地域で異なる家の造り

①

阿部家住宅 (栄村塙)

栄村教育委員会提供 黒室 )

江戸時代後期の建築と推定される。

突き出た部分に馬屋と便所を設け、先端に出入り口がある。庭には、雪をとかすためのタキとよばれる池がある。中門造り。茅葺き。



冬のタキの  
ようす (●)

雪におおわれた阿部家住宅

②

旧中村家住宅 (美麻村青具)

『長野県立 中村家住宅修理工事組  
合宿』(黒室)

1698年(元禄11)の建築。現在は、  
建築当時の形に復原されている。

柱を太くしたり、棟を南北に長く  
延べなど、積雪に備えた造りとな  
っている。密樋造り。茅葺き。



## ◆気候と家の造り

南北に長い長野県では気候だけでなく、  
生活のようすもまたへんちがついています。  
それぞれの土地の気候風土にあわせて、特  
色ある家が建てられてきました。

新潟県との境にある県北部は、世界の  
なかでももつとも雪の深いところです。そ  
のため、雪の重みに耐えられるように太い  
柱を使ったり、柱の数を多くしたりしてい  
ます。

雪が自然に屋根から落ちるよう、屋根  
の傾きを急にしたり、家の出入り口が下ろ  
した雪で埋まらないように左右に雪を下ろ  
せるような出入り口を設けたりしています  
(中門造り)。屋根や家の壁にはカヤが使わ  
れてきました。

### ◆中南信の本棟造りの家

松本盆地、伊那盆地、木曽谷では、本棟  
造りの独特の民家がつくられてきました。  
本棟造りは切妻屋根、妻入りで、屋根の棟  
の両端(破風)に「雀踊り」といわれる大  
きな装飾があります。この造りは、松本藩  
では武士のほか、庄屋など一部の人間にしか  
許されませんでした。



③

堤内家住宅の屋根（塙尻市教育委員会提供）  
板葺き屋根に格が突き出た樋出しと重石の丸石が見える。



③堤内家住宅（塙尻市堤ノ内 塙尻市教育委員会提供 重要文化財）

江戸時代後期の建築。江戸時代、同家は村の庄屋をつとめた。屋端に大きな雀躍りがある。切妻造り。板葺き。



④野明家土蔵の屋根（原村弘次）

鉄平石が使われている。切妻造り。

◆伝統的な屋根の材料のいろいろ

屋根を葺く材料も、地域によってちがいました。  
茅葺きは、カヤを中心材料に、麦わら・麻秆を補助材料とします。  
板葺きは、クリ・カラマツ・サワラの割板を重ね葺きします。割板の上には、重として石を置きます。  
諏訪や佐久地方には、板葺きの変形として、油を多くふくみ水をはじくシラカバやダケカンバの樹皮の上を平らな自然石で敷きつめる桟皮屋根がみられました。また諏訪地方と望月町には、瓦の代わりに鉄平石をのせる鉄平石葺きもありました。

（大田 典幸）

# トイレの移り変わり

大昔から日本人はさまざまな方法で用をたしてきました。人がトイレという施設をつくるようになったのは8世紀前後のことです。このころ、じかに川へ流す「水洗式トイレ」や土の穴に用をたす「汲み取り式トイレ」が考案されました。

藤原京や平城京（ともに奈良県）では、発掘調査によりトイレ遺構が発見されました。これらがトイレであることを証明できたのは、埋まっていた土から寄生虫の卵が見つかったからです。寄生虫の卵を分析すると、そのころの人びとの食生活や健康状態がわかります。

トイレは基本的に大きな変化はみられませんが、日本各地のトイレの移り変わりをとおして、人がどんな方法で用をたしてきたのか見てみましょう。

（樋口和雄・久保統弘）



③鎌倉時代の初期に描かれた『鷹鬼草紙』

（東京国立博物館提供）

高下駄を履いた女・老人・子どもが平安京の街頭で排便しています。このような光景は日常的に見られたようです。尻をふくのに使用された漆木と紙が地面のあちこちに落ちています。



①绳文時代前期の棧橋形トイレ

（福井県鳥浜貝塚模型 大田区立郷土博物館提供）  
島嶼人が棧橋から尻を突き出して用をたしていたのではないかと想像されます。縄文時代から悪臭や病気をさける工夫がされていたようです。



②藤原京のトイレ様式（大田区立郷土博物館提供）

7世紀末のトイレです。汲み取り式のトイレは役所の共同トイレだったときれいな人たちは踏み板の上で用をたしました。水洗式のトイレは道の側溝から水を引きこんでいて、排水物は排水にもどしていました。



⑤柳之御所遺跡出土の「鶴木」

(平泉町文化財センター蔵)

大田区立郷土博物館提供)

トイレットペーパーがわりに使用されたヘラ状の木製品を鶴木といいます。岩手県平泉の柳之御所遺跡（12世紀後半）からは大量的鶴木が見つかりました。

標準的なサイズは、幅1~2cm、長さ15~20cm、厚さ0.5cmです。東北地方や飛騨地方の山村では、第二次世界大戦後まで鶴木が使われていたといいます。

⑥一乗谷遺跡出土の「金隠し」

(福井県一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵)

大田区立郷土博物館提供)

一乗谷朝倉氏遺跡（福井県福井市）からは、16世紀後半の木製の金隠しが見つかりました。金隠しをそなえたトイレは、室町時代以後には各地でつくられたります。戦国時代には下肥の利用が普及して、ほとんどのトイレは汲み取り式になりました。



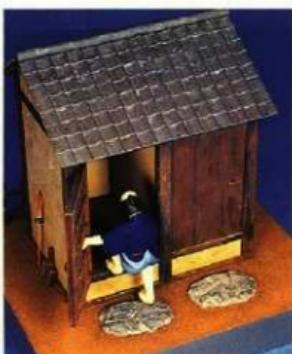
④『暮停絵』に描かれた「廁」

(西本願寺提供)  
小屋のなかに踏み板を並べたトイレがあります。人が行き来するところにあることから、公共のトイレとみられます。14世紀のようすです。



⑧松本城下町のトイレ温構

(松本市教育委員会提供)  
糞がふたつ埋められています。江戸時代に使われた町人のトイレです。村の人たちは田畠の下肥にするために、町の人たちの排泄物を貢っていました。

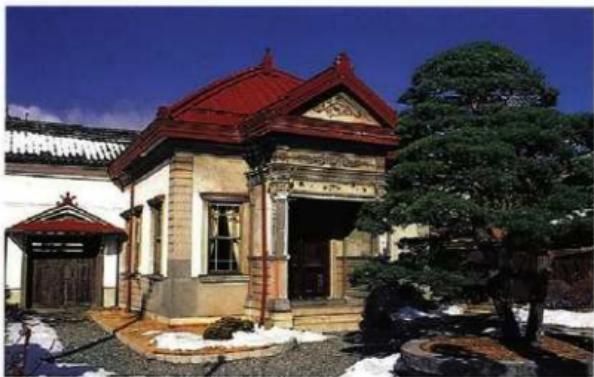


⑦雪隠の登場

(大田区立郷土博物館提供)  
江戸時代には「がげだめ」のほかに屋外に「雪隠」がつくられるようになりました。幕府は下肥を多く得るために「トイレを広くつくれ」と命じていたほどです。



# 長野県につくられた洋館



旧林国藏家南棟正面玄関  
(岡谷市教育委員会蔵)



旧林国藏家応接間天井 (岡谷市教育委員会蔵)  
シャンデリア (左) と金唐紙 (右)



## ◆長野県内の洋館

長野県での洋風建築のはじまりは、明治初年といわれています。松本では、学校・官庁・教会がまず洋風につくられ、理髪店や写真店・風呂屋などへ広がつていったといわれています。なかでも女鳥羽川岸につくられたいた開智小学校は洋風建築の代表で、八角の望楼と、窓の船来ギヤマン（ガラス）から「ギヤマン学校」とよばれました。このような洋風建築が、学校のみでなく長野県の富裕な人たちの中に広まつていき、洋館が各地につくられました。

岡谷市御倉町にある旧林国藏邸は、明治中ごろに建てられました。製糸王片倉家と並ぶほどの力をもつた製糸家で、その全盛期に国藏自らの指示でつくられた洋館は非常に豪華です。木造建築で、壁は漆喰塗（後に漆喰を人造石洗い出し仕上で補修）、内部の天井には金唐紙が一面にはられています。この紙は、オランダから来た金唐革という高級な壁材料に模して、明治二〇、三〇年ごろ輸出用として日本でつくられました。塗りした上質の和紙に金箔をおし、模様を打ち出した豪華な壁紙が現存してい

## ◆洋風建築のはじまり



宮島宏家

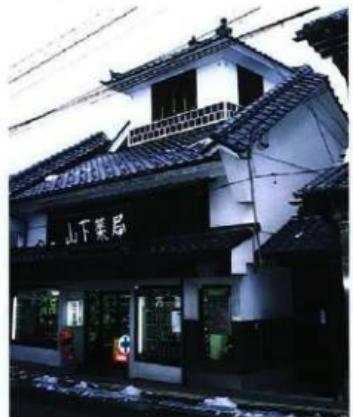
(松本市城東 1909年)

木造二階建て、正面の両面に塔型の飾り屋敷、中央には直接の坡風等西洋建築を取り入れて工夫されている。



折井正明家（松本市白板）

独立書齋の窓の上部がステンドグラスになっている。



山下篠屋（須坂市中町 1870年代）

卯建のある日本家屋に望楼が増築されている。

るのは、長崎のリングガーデンなど数例あるだけです。

長野県内に現存する洋風建築としては、学校関係では旧開智学校・旧中込学校など、製糸関係では片倉館の浴場・吉田館の繭倉庫など、教会関係では、旧松本カトリック教会祭館・日本キリスト合同教会屋代教会など、観光関係では、三笠ホテル・野尻湖ホテルなどがあります。

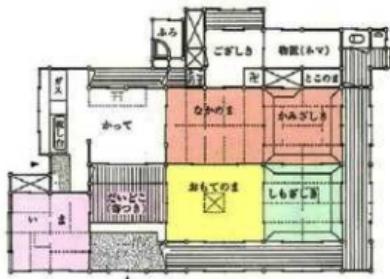
#### ◆住宅の洋風化

洋館の流行にともない、和風住宅の一部を洋風化する住宅もあらわれました。

ステンドグラスをはめた住宅が、松本市に現存しています。子女の勉強部屋にはめられたステンドグラスは、非常にめずらしいものでした。子どもたちは七色の光の中で、一生懸命勉強したことでしょう。

須坂市では「卯建」のある古い築屋では、母屋に増築して、望楼がつくられました。押入の中にある階段を上ると、四方の窓から雄大な風景を見るることができます。鉄製の鎧戸のハイカラなデザインも文明開化の広がりを現在に伝えています。

# 養蚕農家の移り変わり



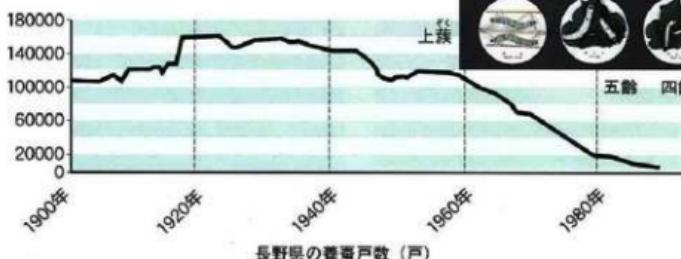
蚕場所の広がり (神村村の養蚕農家の例 多田井幸視論文の図版より作成)



家のなかでの養蚕風景 (諏訪市 1973年 諏訪市博物館提供)

飼育段階	養蚕空間
一齡 イ	しもざしき (緑)
二齡	
三齡 □	イ十おもてのま (黄)
四齡	
五齡 ハ	口十なかのま十かみざしき (橙) ハ十いま十よりつき (赤)
上蔟	

網をつくるころには、生活空間は居手のはかは2部屋だけになった。(蚕の一生については右図を参照。)



五一  
一齡  
二齡  
三齡

## ◆蚕を飼う家

長野県では、明治から昭和なかばにかけて多くの農家で蚕を飼い、繭を出荷していました。繭の生産量は長く日本一を誇っていました。

養蚕農家の戸数は一八八五年(明治一八)には約七万戸でした。その後増え続けて、一九一九年(大正八)には一六万戸をこえました。長野県全部の家の六〇%で蚕を飼っていたことになります。

蚕は「お蚕さま」とよばれ、とてもたい

せつにされました。養蚕の時期になると、ふだん生活している部屋の畳を上げて蚕室にしました。蚕が大きくなるにつれて場所はどんどん広がり、台所や蚕の間で寝たという家もありました。

多い家では、春から秋にかけて五回以上も蚕を飼いました。その間、蚕と同じ屋根の下で生活をともにしていました。

### ◆養蚕のための家の改造

養蚕がさかんになると、家を改造してより広い面積を確保するようになりました。

伊那地方では明治前期には、本棟造りの二階で養蚕を営む家がありました。明治末



瓦葺き総二階の蚕室（左：東部町 右：上田市）



土蔵造りの蚕室（東部町）



本棟造りの二階を利用した（伊賀農の民俗）



現在の蚕の飼育風景（2001年）



別棟の蚕室（伊賀農村史）

からは母屋の横に蚕室を建てたり、母屋を改築して総二階にする家もあらわれました。そのほかの地方でも茅葺きの平屋を瓦葺きの二階建てにする家が大正期には増えました。

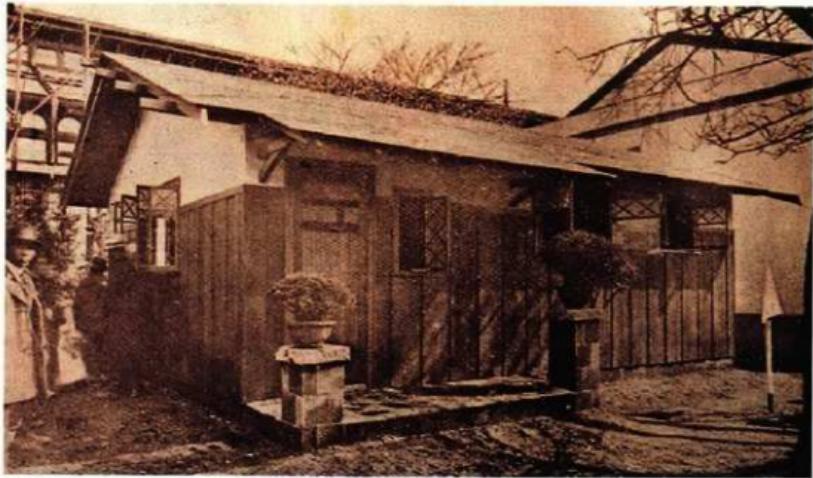
上田・小県地方では土蔵型の蚕室が多くみられます。屋根の上に小さい屋根や煙突のようなものがあるのが特徴です。これは気抜けとか煙出しどよばれ、換気をする仕組みです。

#### ◆蚕を飼う場所の変化

大規模な養蚕がおこなわれるようになり、一九五〇年代から養蚕を家のなかではなく、別棟の飼育場でおこなう家が増えてきました。家の敷地内や畑の鉄骨のハウス・小屋などが使われました。それまでの蚕室は、寝室や子どもたちの部屋などになりました。家の敷地内に別に建てられた蚕室も養蚕がおこなわれなくなると、物置や車庫、離れとして利用されるようになります。

現在では二階建ての蚕室の数がとても少なくなってしまいましたが、養蚕農家の面影を残した家はまだ各地にあります。（市川包雄）

# 大正時代の住宅事情



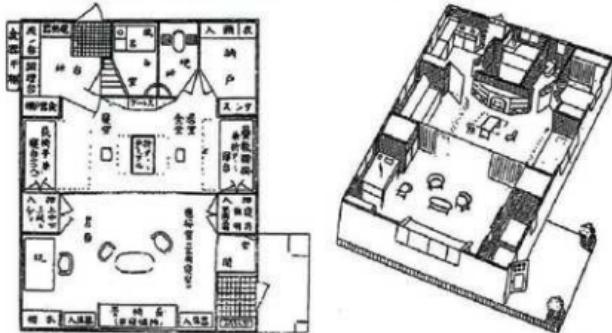
文化村に出品された

住宅と設計図

(『平和記念東京博覧会出品

文化村住宅設計図説』

県立長野図書館蔵)



## ◆文化住宅のかたち

文化村につくられた住宅の特色は、家族本位の住宅であったということです。居間を中心につくられた住宅は、それまでの座敷中心の住宅とは大きく違っていました。昭和期になると、玄関脇を板敷きの洋間にし、立机・腰掛などを置いて、応接間とした形も文化住宅というようになります。建物の中心に廊下が通つていて中廊下式の住宅で、最新設備のガス・水道等つきに、和式の居間や寝室が特徴です。

◆文化住宅のおこり  
大正時代になると、都市部に住む人びとを中心に和洋折衷の生活様式が広がり、ふつうの住宅の中にも洋館の影響を受けたものが、つくられるようになります。現在の個人住宅の原型である「文化住宅（洋室つき住宅）」の登場です。一九二二年（大正一一）東京上野で開かれた平和記念博覧会では、住宅実物展がおこなわれ、「文化村」とよばれました。ここで展示された洋風色の強い住宅を「文化住宅」とよぶようになりました。文化に対する当時の人びとの憧れもあり、広まつていきました。

# 文化村の

## 出品品住宅を摸範住宅を建設すべく

### 課長會議で考究

木縣では課長級の住宅を八種地盤に計上し、議題を表した。のであるが、敷地は、事官舍の東側、市内近郊、学校附属、駅前、所處の西隣、所處の東隣としてあるけれども、また右八種の御園にては、地主が所有するものである。

最初知事の官舎附近に、

（建設局）

### 平和博覽

會に出品し

てある文化村の住宅夢をも觀察し

する等で何れ、三月中に課長會議

で開いて色々考究する事になつて

ある。長野名古屋開港場の建築方

式で、最も安價に上げ得るのであ

るが、これが、文化生活を此の場合

を成るべく理想的なものにして貢

ふ所の文化生活に順應した建築方

式で、最も安價に上げ得るのであ

るが、これが、文化生活を此の場合

を成るべく理想的なものにして貢

ふ所の文化生活に順應した建築方

式で、最も安価に上げ得るのであ

### 考慮の

としてそし

て、建築方式を考へ、摸範の住宅をしきりめて少いだらうに以して、松本の開拓が止むなく五万戸間をかかれて、ここは、此事の建築は、必ずしも文化生活を此の場合にめて、考究ので、猪さゆみの意見である。（松本商店）

### 三百圓の家

均價額で、住居は

坪居間で、

坪居間で、

坪居間で、

坪居間で、

坪居間で、

坪居間で、

坪居間で、

坪居間で、



文化村の住宅を調査することを伝える新聞記事（『信濃毎日新聞』1922年（大正11）5月3日付）

### ◆公益住宅の広がり

都市部に人口が集中するようになると、

長野市や松本市では住宅難が叫ばれるようになります。一九一八年（大正七）には、県や市は住宅策を建て、公益住宅（現在の県・市営住宅）を各地につくりました。

（県）課長級官舎として「一三軒つくられたものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽二）に課長級官舎として「一三軒つくられた

ものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽会で、『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽

二）に課長級官舎として「一三軒つくられたものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽

二）に課長級官舎として「一三軒つくられたものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽

二）に課長級官舎として「一三軒つくられたものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽

二）に課長級官舎として「一三軒つくられたものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽

二）に課長級官舎として「一三軒つくられたものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽

二）に課長級官舎として「一三軒つくられたものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽

二）に課長級官舎として「一三軒つくられたものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽

二）に課長級官舎として「一三軒つくられたものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽

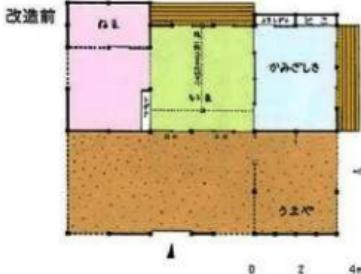
二）に課長級官舎として「一三軒つくられたものがございました。『文化生活を考慮して、模範的住宅を建設する』ために、平和博覽

文化住宅の宣伝  
（『信濃毎日新聞』  
1923年（大正12）  
6月30日付）

# 生活の変化と住まい



台所の改造（『長野県広報』第124号 1956年 稲高町）  
「うまや」を改造して台所にした。衛生面や作業効率を考えたものがつくられた。



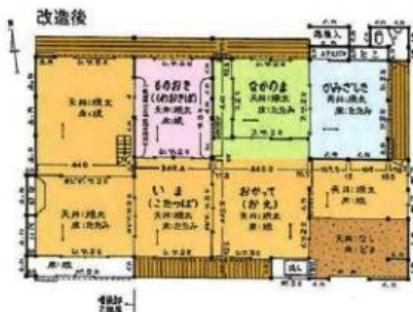
**住宅改造をしましよう**

**五年計画で五万戸を改造**

一戸に三万六千円まで融資

改修資金

『長野県広報』第121号のよびかけ（1955年）  
住宅不足が深刻であったため、改修により住宅を長く使うことが必要であった。



住宅の改修（『茅野市の民家』に着色）

家のなかの改修がおこなわれ部屋のなかが板壁（図中「イ、カ」）などで仕切られ、土間も姿を消した。古い窓を新築せず改修する場合も多かった。改修時期は不明だが、下図は1973年の状態である。

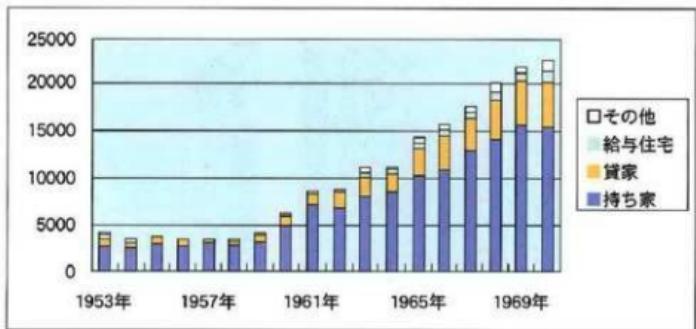
◆個室ができる

一九六〇年代になると県民所得が大きくなり、生活が安定してきました。そして、家の増改築や新築がさかんにおこなわれました。このときに、欧米の生活様式を取り入れられ、部屋の個室化が進みました。それが以前の複数の部屋が、壁で仕切られた部屋になりました。結婚式やお葬式は、公民館など

一九五〇年ころから農村部を中心に、生活改善運動がおこなわれ、家屋のなかが見直されました。まずははじめに注目されたのが台所です。ご飯を炊くまどを新設したり、煙突をつけたりして改良しました。家のなかに水道が引かれ、流しが高くなりました。土間にあつた台所が板の間になり、調理するときに、立つたりしゃがんだりする回数がへりました。また、ガラス窓をつけ、以前の薄暗い場所から明るい場所へと一変しました。外にあつた便所を母屋のなかにつくったり、風呂場を新しくつくつたりもしました。縁側の外側にもガラス戸がつけられ、縁側が廊下になりました。

## ◆家の中の改修

住宅の新築数が1960年ころより増加している。高度経済成長とともに家を建て直しが進んだことを示している。  
（「長野県統計書」より作成）



長野県における着工新設住宅数（利用別）1953～1970年



団炉裏がなくなり家族が集まる場所が変わる

（右1949年、左1990年ごろ 阿智村『御谷元一写真全集』）

団炉裏は家族が集まる場所の中心でもあった。改築・新築により電気炬燵のまわりなどに家族が集まるようになった。

子ども専用の部屋（熊谷元一撮影 1970年 阿智村）

子ども部屋ができてスチール製の学習机が置かれた。

広いところでするようになり、自分の家で  
する必要がなくなってきたのです。

なかには子ども専用の部屋をつくる家も  
出てきました。祖父母と離れて暮らしたり、  
子どもの数がへってきたために子ども部屋  
也可能になつたのです。

生活様式の多様化により、自分たちの生  
活にあわせた間取りにして、家を建てるよ  
うになりました。目的にあわせて畳、板の  
間の部屋がつくられています。部屋の入り  
口も引き戸だけでなく、ドア式のものも最  
近は多くなつてきました。

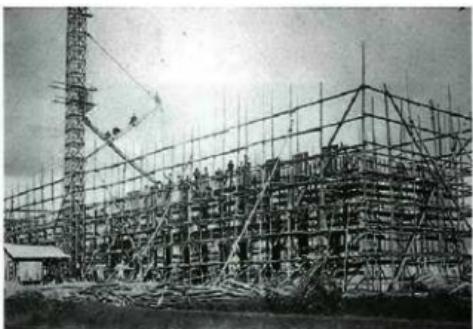
#### ◆姿を消した団炉裏

部屋の間取りが変わるなかで、家のなか  
から団炉裏がなくなりました。それまで団  
炉裏の役割であつたご飯を炊くことは炊飯  
器に、部屋を暖めることは電気炬燵やスト  
ーブなどになりました。薪木や木炭も使わ  
なくなり、家のなかから姿を消していきま  
した。

# 鉄筋コンクリートの家・これからのかの家



変わる松本市伊勢町の町並（松本市 2001年撮影）  
1930年撮影の町並（右）とはほぼ同じ場所の写真である。



高層住宅（長野市 2001年撮影）  
長野県でも都市部を中心に高い建物が増えてきた。

鉄筋コンクリート校舎建築のようす（1923年 唐木田実提供）  
更級高等女学校（篠ノ井高校）、塙科中学校（星代高校）、旧県立長野図書館などとともに初期の鉄筋コンクリートの建物である。

## ◆鉄筋コンクリートの家

長野県で鉄筋コンクリートの建物ができるたのは、大正期になつてからです。役場などではじまり、さらに会社や学校にも取り入れられました。昭和期になつてからは民間住宅もできました。

鉄筋コンクリートの建物が多くできて都市部の町並は大きく変わりました。一九六〇年代からの高度経済成長をさかいに変化がはつきりとしてきました。現在では一〇階建て以上の高層住宅もできています。

## ◆これからのかの住宅

鉄骨などを使用した新しい工法の家が建てられていますが、長野県では木造の家が多く建てられています。輸入木材が増えるなか地元木材を見直し利用を進める活動がおこなわれています。ヒノキや杉・赤松・カラマツなどが代表的な木材です。

晴天が多いなどの理由から、長野県は太陽光発電の施設をもつ家の数が全国で上位になっています。これからは長野県の風土にあわせて、しかも環境問題を考えた家づくりの取り組みが求められています。